

平成28年度第1回 横浜美術館指定管理者選定評価委員会 会議録

- 1 日 時 平成28年8月3日（水） 13時00分～ 14時45分
- 2 場 所 横浜美術館 円形フォーラム
- 3 出席者 高橋委員、西田委員、丸山委員、村井委員、吉本委員
- 4 欠席者 なし
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事内容

議題	<ul style="list-style-type: none"> 1 定足数の確認 2 委員会の公開 非公開について 3 委員長の選出 4 平成27年度指定管理者業務の報告及び自己評価 行政評価の説明 5 平成27年度指定管理者業務についてのヒアリング
委員 意見 等	<ul style="list-style-type: none"> 1 定足数の確認 委員数5名のうち5名の出席により定数を充足しており、会議の成立を確認した。 2 委員会の公開 非公開について (審議結果) 横浜市の保有する情報の公開に関する条例 第31条及び横浜美術館指定管理者選定評価委員会運営要綱第9条に基づき、公開とした。 3 委員長の選出について 横浜美術館指定管理者選定評価委員会運営要綱第6条に基づき、委員の互選により丸山委員を委員長に選任した。 4 平成27年度指定管理者業務の報告及び自己評価 行政評価の説明 横浜美術館指定管理者から平成27年度指定管理者業務の報告及び自己評価の説明。 横浜市から平成27年度指定管理者業務の行政評価の説明。 5 平成27年度指定管理者業務についてのヒアリング (質疑) (委員) 「村上隆のスーパーフラットコレクション」展について、より集客が期待できたのではないかと。(指定管理者) 会期が56日間と短かったと考えている。期間が年度末の時期と重なったこともあり、4月以降の会期の延長も検討したが、次の展覧会のスケジュール上変更が難しかった。 会期の設定については、展覧会の内容やターゲットを考慮して決めていきたい。 (委員) 入館者数に関して、行政評価のCは厳しい印象である。目標入館者数はどのように試算しているか。

(指定管理者)

横浜美術館での過去の展覧会実績や他館での展覧会実績を参考にして設定している。

(委員)

どのくらいの人数に来館して欲しいという数字の設定はしないのか。

(指定管理者)

目標入館者数は、広報費にも関係してくるため、予算や地域差など総合的に勘案して、現実に即して設定しているが、簡単に達成できる人数にはしていない。

(委員)

民間の美術館の場合、先に収支を設定してそこから入館者を逆算している。それも1つの方法と考える。

(指定管理者)

基本的には同様だが、日本画の展覧会の収支設定が難しい。平成27年度では「中島清之展」が、作品の耐久性上、会期は延ばせないが、ガラスケースの設置など経費はある程度かかった。そのような収支を考えると目標入場者数の設定は高くせざるを得ず、達成が厳しかったが、広報費をかけられないので、学芸員が各区役所でトークを行ったり、無料開館や夜間開館などの実施で入館者数増の取組を行った。

(委員)

市民協働について、「蔡國強展」での大学との作品制作などの連携やビジターサービスにおけるボランティアの育成など、館全体で多岐にわたり市民協働が深化しており、広がりを持って取り組んでいる。

コレクション・フレンズにおいて、上位階層の会員への特典への準備とあるが、具体的にどのようなものか。

(指定管理者)

企画展オープニングへの招待、企画展カタログの贈呈の特典を付けて参加を募っている。

(委員)

横浜美術館の運営としては、それぞれが役割を果たし、良い運営ができています。一方で、市のスタンスとして、政策協働として行っているが、定量的な評価に重点を置き過ぎではないかと考える。重要な取組の定性的な部分についても、もう少し評価すべきではないか。例えば、知名度のあまり高くない作家を取り上げて、市民に広く紹介したなどの実績も十分に考慮することを検討していくべきと考える。

細かい指標のみで判断するのではなく、本来の政策的な目標についてどのように取り組んでいるかという視点が欠けないよう留意してほしい。

(市)

市としても定性的な部分で高い評価をしており、定量的な部分でも基準に照らし合わせて評価を行っているが、指摘をいただいた通り、様々な事業についてどのような評価方法が適正であるかは、他の施設も含めて引き続き考えて行く必要がある。

政策協働の中で、様々な意見を交わしながら運営を行っているが、市としても長期的な視点のなかでどのように目標を設定するかは委員会からの意見ももらいながら取り組んでいきたいと考える。

(委員)

横浜美術館のここ数年間の実績は、様々な点で向上してきており、そのようなことが評価されて

地域創造大賞の受賞ができたと考える。

メディア展が東京の美術館を軸にしているということについて、実態としてはどのようなものか。
(指定管理者)

東京と横浜は距離的には近いが、地方の美術館と国立の美術館などではメディアの条件が大きく違う。メディアも収支上のリスク回避の傾向が強まり、多く集客が見込め夜も開館する東京の美術館での開催を優先し、また、知名度の高いアーティストや著名な美術館のコレクション展など集客しやすい展覧会が中心となっている。

今年度に横浜美術館で実施している「メアリー・カサット展」は、横浜美術館から提案し、メディア展となった。

(委員)

企画展を実施するうえで、メディア展は有効な手段であるので、「メアリー・カサット展」のように取り組んでいくべきと考える。しかし、そこにこだわり過ぎると横浜美術館の独自性を見失う可能性もあるので、慎重に検討していくのが良い。

「村上隆のスーパーフラットコレクション展」における森美術館との連携はどうだったか。

(指定管理者)

広報で連携し、横浜美術館展覧会告知について非常に協力をいただいた。森美術館では閉館時間が遅く、仕事帰りの方も多く来館していたようであるが、横浜美術館ではそこまでは見込めないのと同じような閉館時間の設定はできなかった。

横浜美術館での開催は、急遽決まったということもあるが、会期の設定方法に検討の余地はあったと考える。

(委員)

市の評価について、入館者数が目標の93%であるためにC評価となっているが、事業の質も踏まえて、評価の基準の妥当性を検証したほうが良いと考える。

(市)

評価の基準について検証していくことは重要であると考え。今回の評価では、項目の一つとして定量的にC評価を付けているが、全体としては高い評価をしている。当初の目標の設定方法も検証する必要があると考える。

(委員)

目標入館者数の設定では、収支も関係しており、機械的な算定でもある。展覧会のどのくらい入れたいかという設定があれば反省材料になると思うが、93%でC評価は違和感がある。

(市)

税金を投入しているため収支バランスは重要であると考え。マイナスの部分はあるが、全体として収支が均衡しているという設定は必要になってくる。どの程度の人に入ってほしいという目標があり、それに対して経費をかけていくというやり方もあると思う。

(委員)

指定管理期間は10年であるが、毎年、事業費の均衡をとることが必要となるのか。

(市)

予算の制度では、単年度の会計となり、その中で指定管理料を計上しているため、各年度のなかでバランスをとれることが理想である。

(委員)

来年度以降の評価方法の検討については、評価表の中で表現しないのか。

(市)

評価方法は他の施設も含め全体で考えて行く必要があるため評価表の中での記載はしない。

(委員)

数値としては低いけれども、内容的に画期的な取組や将来に繋がる取組もあり、必ずしも芸術的な取組の価値と数値が一致することがない場合もある。

また、評価の項目について、各項目の評価だけでは表現できない部分もある。例えば市民協働について、ボランティアなどに焦点を絞った評価だけを行うのではなく、アート教育など大きな視点での市民協働についても付記できるような仕組みであると良い。

(市)

美術館の運営は、政策協働で行っており、様々な意見を交わしている。評価についても、評価表を基に、今後のより良い運営に活かせる材料にしていきたいと考える。委員からの指摘を踏まえ、一定の評価として行う上で、他施設も含めて方法を検証していく。

議事は以上